

都城市議会議長 様

提出日 令和6年11月7日

氏名 成合 円美佳

研 修 報 告 書

以下のとおり研修の報告をいたします。

1 所属会派名

自由民主党有志会

2 研修名

第86回全国都市問題会議

3 受講場所

アクリエひめじ (姫路市文化コンベンションセンター)

4 受講期間

令和6年10月17日(木)～令和6年10月18日(金)

5 研修内容

健康づくりとまちづくり～市民の一生に寄り添う都市政策～

6 研修の感想

今回は、健康政策に積極的かつ先進的な取組をしている自治体の市長の方々の報告と、生命や健康に関する研究に長年取り組んでいる大学教授の方々の講演を聞く研修であった。自分自身がまだ30代ということもあり、健康政策への関心はそこまで深いものではなかったが、高齢者や医療の話だけではなく、子どもたちの心の健康の話や、少子化対策にまつわる話もあり、大変勉強になる研修であった。

姫路市の清元市長の報告では、4つ気になる事業があった。1つ目は、若い世代の子宮がん検診の受診率向上のために、20歳から30歳までの2歳刻みで検診費用を無料化したり、20歳代の子宮がん検診未受診の方へ自己採取 HPV 検査キットを送付したりしていることであった。これは都城市では未だない取り組みであり、究極の少子化対策のために、女性の健康問題を徹底的に解決しようと、できることはすべてやっているという姫路市のやる気に感銘を受けた。

2つ目は、AMR（薬剤耐性）対策推進のまち宣言をされていることで、抗生物質をむやみに出さないということだったが初耳だった。確かに、細菌感染症にかかる人が新型コロナウイルス流行後に、とくに増えていると聞くので、薬の適正な飲用により、本来もっている抵抗力を弱めないようにすることも大事であることが分かった。

3つ目は、子育て応援アプリ「ひめっこ」についてである。我が子の最適な予防接種日をプッシュ型で配信してくれるという機能が大変よいと思った。本市にも母子手帳を電子化したアプリがあるが、実際にダウンロードしてみて、役に立たなかった。この程度の機能であれば、他にいくらかでも類似のアプリがあるため、わざわざダウンロードしようとはならない。姫路市の「ひめっこ」という子育て応援アプリのように、アプリのほうから情報を発信してくれるものに改善できないか、今後の一般質問等で提案したいと思う。

4つ目は、姫路市のヘルスプロモーションである。本市において、市民の声を聞く活動の一環で、議会がない時は、自転車で活動報告を一軒一軒配りながら、市へのご意見を頂戴しているが、高齢女性から「バス停が遠すぎるから家の近くに作ってほしい」という声が複数あったことを思い出した。どのくらいか、それは徒歩で15分ほどであった。姫路市がウォーカブルなまちづくりをかかげ、駅から本研修の会場であったアクリエひめじが900m、駅から姫路城が800mということで、沿道には休憩できる憩いの場や、椅子やテーブルなどを各店舗に常設専用物として設置し、歩きを促すことで市民の健康を目指しているという話があったが、試しに歩いてみると、30分以

上かかり、疲れ果ててしまい帰りはタクシーに乗った。夜はイルミネーションが施されるので、夜だったらまた違ったのかもしれないが、やはり都市の移動感覚と、都城の移動感覚はまるで違うと思った。なんでも便利になるのはいいことのように思いがちだが、この研修を受けたことで、バス停が遠いという相談を受けたあの日、「健康のために15分くらい歩きましょう」とむしろ伝えたほうがよかったのだろうかと考え直した。

千葉県流山市長の報告では2つ気になるものがあった。

1つは、市が率先して、住宅街に緑を増やす取り組みである。確かに最近の新興住宅は緑が少ない。砂利やセメント、タイルを敷き詰めて、土も花壇もない。地球温暖化に目を向けると、庭に木が植えられているのと、植えられていないのとでは、室温に違いが生じるという話であった。しかし、本市における現状に、この取組は合わないものと思った。新たな視点ではあるが、本市の場合は管理問題が先である。市道の草刈りだけでも大変なのに、これ以上各家に緑を増やす取り組みはないなと思った。

2つ目は、認可保育所における要配慮児童の受け入れ拡大のため、市の補助金を用いて各園に加算措置をとったという取り組みは素晴らしいと思った。本市における実態も調べてみようと思えるよいきっかけになった。後に調べると、本市では、都城市障がい児保育事業補助金と、都城市多様な事業者の参入促進・能力活用事業補助金という2種類が要配慮児童のスムーズな受け入れにつながっていることがわかり、市民のほうから入れないなどの苦情は届いていないことが確認できた。一方で、園のほうからは、この補助金の額について、もう少し手厚くしてほしいというような声はあるということも分かった。

AIによる分析を得意とする兵庫県立大学の畑副学長の話では、2つ気になるものがあった。一つ目は、日本人の死因のランキングについて、75歳以上の高齢者、とくに男性が誤嚥性肺炎で死亡している割合が急増してという話があった。

人と人とのコミュニケーションの希薄化は、健康にも害を及ぼしているのだとい

う。AIを用いた嚥下解析によると、歌手という職業の方は特化してこの誤飲性肺炎になるリスクが低いことが分かり、ぜひ、日ごろから歌を歌う訓練によって予防をするべきだという話は興味深かった。本市における誤嚥性肺炎の原因や予防策を健康課にたずね、各自治公民館への支援の一環で、カラオケ機器の導入補助など、質問の機会があれば提案してみようと思った。

もう一つは、不妊の原因は男女両方にあり、可能性も半分半分の割合だということで、不妊診療クリニックの診察時間を工夫するべきだという話がよかった。不妊に悩む世代はおそらく働き盛り、夫婦一緒に平日の昼間に病院を訪れるのは難しいので、土日限定18時以降の診療に限って運営すべきだといった話があった。沖縄県にあるクリニックはもっとすばらしいらしく、まるでリゾート旅行に来たかのような感覚で、子どもを産むことができる産婦人科クリニックがあるという話だった。ニーズに寄り添う本気度が伝わってきた。

18日行われたパネルディスカッションでは、高岡病院の児童精神科医の三木先生による話で、荒れていく子どもたちの健全な居場所づくりへの話があった。トヨコキッズという言葉があるように、居場所を求めてたむろする子どもたちがいる。東京に限らず各自治体で、必ずどこか不健全なたまり場ができてはいるはずだという話であった。不健全な居場所に集まらせないようにするには、それ以上に居心地のいい健全な居場所を増やすことだという話があり、早急に、都城市議会で政策提言している都城駅のワーキングスペースづくりや、高校生もたくさんくる児童館への刷新など、子どもの居場所にまつわる話題をとりあげていきたいと強く感じた。自殺するこどもも増加しているということで、都城市はどうなのか調べるきっかけになった。後に調べると、宮崎県の人口10万人に対する自殺死亡率は20.2でこの値は全国でワースト5位と自殺率は高い状況であることが分かった。都城市は令和5年の自殺者は26人で自殺死亡率は16.1となっており、全国の17.6%よりは低くなっている。また、都城市の自殺者の約6割は、一人暮らしではなく同居者がいる

ということも分かった。都城市では市民向けにゲートキーパー養成講座も実施しているということで、この取組の成果も注視していきたい。

大阪府泉大津市の南出市長の話では、4つ気になる話があった。1つ目は、乗り合タクシーは高齢者だけのものではないという話で、AI乗合オンデマンドを整備することで、学生も通学に使っているのだという。多世代が利用することで交流にもなる。高齢者はスマホが苦手だとよく言うが、あと10年もたてば、みんながスマホで予約できる時代がくると読んでいるとのこと。本市では一応、市街地にあたる祝吉地区においても、乗合タクシーを求める声は確かにある。公共交通について、市の現状をもう一度細かく調べてみようと思うきっかけになった。

2つ目は、フードリボンプロジェクトというもので、こども食堂の進化版である。フードリボンプロジェクトとは、地域で、まちぐるみで、こどもたちの一食を日常的に支えることができる新たなこども食堂のカタチ。飲食店を利用するお客さんが1つ300円のリボンをこどもの一食分として「先払い購入」して、店内に掲示する。こどもたちは、それらの掲示されたリボンを1つ手に取り、1食分の食事ができる仕組みである。フードバンクの維持管理がきついという声をNPO団体から聞いている。都城市は飲食店も多いように感じる。都城市においても何かできないか、どこかの機会で一般質問に取り組みたい。

3つ目は、妊婦とお腹の赤ちゃんのために、金芽米を毎月最大10kg無償で提供しているというマタニティ応援プロジェクトである。それだけではなく、小中学校の給食も、栄養素の高い金芽米にすべて変えたという大胆な事業である。金芽米は泉大津の特産品ということで、需要が増え、農家を支えることにもなり一石二鳥。お金を配りそうなところを、食べて消化する米に変えるという発想は素晴らしい。都城市でも何かしらできないか考えたいと思った。

4つ目は、国の予防接種後健康被害救済制度を申請する人を対象に、申請までにかかった医療費等の費用の一部を支援する支援金制度をとっているという話である。地

域を自転車で回って、話を聞いてきたなかで、2軒ほどだが、コロナウイルス予防接種ワクチンのせいで、身体中の肌が荒れている市民の方に出会った。全体では数は少ないかもしれないが、国を待たずに、市民をしっかりとサポートする、誰一人取り残さないという姿勢が市長として本当に頼もしい限りだと思った。これについても、都市におけるサポート体制はどうなっているのか確認をしておきたいと思うきっかけになった。

7 研修の成果及び市政への反映

この研修で知り得た知識のなかには、政策的なものだけでなく、一般市民にとっても有益なものが沢山あった。この報告書にまとめあげたことは、短くまとめた動画をYouTubeで発信するなどして、本市の市民の皆さんにも伝わるよう周知に努めようと考えている。

この研修によって知り得た他市における新たな事業は、本市の場合はどうなっているのだろうと、本市の状況を調べるきっかけとなった。

現時点で、調べ終えたもの、これから調べるものがあるが、すべてにおいて、担当課への聞き取りや資料請求等を行い、今後の議会での一般質問等や、議案審議、政策提言など、様々なものに活かしたいと考えている。

8 添付資料

- ・研修画像等

第86回

全国都市問題会議

健康づくりとまちづくり

「市民の一生に寄り添う都市政策」

会期 令和6年10月17日(木)・18日(金)

会場 アクリエひめじ (姫路市文化コンベンションセンター)

主催 全国市長会、(公財)後藤 安田記念東京都研究所、(公財)日本都市センター、姫路市

